
ROUGH-HEWN TRAVELERS

ししろー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ROUGH - HEWN TRAVELERS

【著者名】

N4403A

【作者名】 ししるー

【あらすじ】

西洋チックな異世界物語。仲間を集めて戦う一チエの物語。

第1話——チエの少年時代

「『』の世は生まれたとき混沌に在った。秩序が芽生え、破壊され、また混沌となり。繰り返す。その輪廻の中で混沌に立ち向かう者は英雄と呼ばれた。秩序を破壊する者は凶と呼ばれた。どちらが正しいということは重要ではない。どちらが生き残るかということが重要なのだ。』コレはリーザー王国初代国王リーザー・ディンバルトの著書の一部ですね。いくつかの暦を越えて、この世をリーザー暦と区切り、今私たちが生きているのがリーザー暦2548年となるわけですね。」

「もう、何度も聞いた。」

あからさまに嫌そうな顔をする少年に家庭教師のウイック・カスケードはため息をついた。この少年こそ、リーザー王国139代国王候補のチエ・ディンバルトその人なのだ。茶色いクルクルのくせつ毛が宮内の女性に物凄く人気がある。漆黒の目に真っ白い肌は病弱を思わせるが、実際は腕白で、外に出る事も少なくない。

「それでは、今日はもう剣の練習にしましょ。表へ出てください。」

チエはその言葉に、表情をパッと明るくして剣を手に取った。
「今日はウイックから一本取る一手を抜いたら承知しないからな！」

？

ウイックは
「はいはい」

とうなずいて練習場へと向かった。

「たあああ！」

チエの気合いの入った声が響く。ビキィという音と共にウイックが木剣をいなす。

「もつと踏み込んで…」
「」

「 ウイックの木剣が二一チエの喉一寸で止まる。

「はあ、はあ。」

息を荒くしてその場にドッキと座り込む。

「だあああ一惜しかつた…」もつ一回じよつて…」ウイックは息を整えた。

「今日はこの辺で終わらにしましょ。もつ一時間半も続けていますから。」

二一チエは膨れつ面で練習場を後にした。

ウイックは汗を拭き、二一チエについて考えた。（はあ。国王になると申し訳すればよいのか。勉強はすごいぶるでかい。剣も15にしつは抜きんでている。しかし、あの言葉遣い。言動。いつまで経ても治らない。どうにか王室として恥ずかしくない振る舞いをしてほしいのだが…。そもそもどうしてあの言葉遣いを覚えてくるのだろうか？）

二一チエは剣の練習を終えたあと、汗を拭きながら練習着のままこつそり裏庭に向かった。木を登り塀に足をのせ、外にある馬小屋の屋根に飛び降りた。さらに飛び降りて、音もなく地面に着地した。そうしてこつものように村へと走つていった。

「キート？居るか？」

「二一チエはあまり立派とは言えない小さめの家のドアをノックした。

「ああ、今出るよ。二一チエ、今日は家庭教師じゃなかつたの？」

すぐに出てきたキートという少年は眼鏡を指で押し上げた。

「今日はもう終わつたからどうか行かないか？」

二一チエが言つと、キートは靴を履きながら言つた。

「どういく？ 今日は市場に用事があるんだ。一緒に行く？」

「市場は沢山の人で」つた返して、

「こつ来てもここは賑やかだな！あ、あれハーレンじゃない？」

二一チエが指を差したほうを見るとそこには背の高いいくつか年上の男が立っていた。髪は金色の短髪で瞳はグリーンに輝いている。

誰が見ても色男だ。

「あつ本當だ！ハーレンさーん！」

キートが呼ぶとハーレンも氣付いたらしくこちらに歩いてきた。

「おひ。二一チエとキートか、久しぶりだな。二一チエ、こんなとこりにいるとまた兄貴に叱られるぞ。」

ハーレンはウイックの弟で、若くして城下の警備団の団長で、近隣の村の少年達の憧れの的だ。団長のくせに警備団の中では一番陽気な人間だらう。ウイックとは髪の長さと目付き、性格の違いを除けばとても良く似ている。

「大丈夫さ！ハーレンは内緒にしてくれるだろ。ハーレンこそこんなとこで仕事さぼつてていいのかよ？」

ハーレンは二一チエの耳に囁いた。

「これでも仕事中でな、この付近で少し妙な噂があつてな・・・。いいから他の団員に見つかる前に今日は帰りな。」

二一チエは渋々とキートに別れを告げ市場から抜け出て、家路に着いた。

いつものように城の堀に上りうとしたとき、馬小屋の横に見知らぬ男が座っていた。黒いフードを身に纏い顔は隠れて見えない。

「・・・だれだよ？」

二一チエが恐る恐る聞いてみる。

「ぼくはね、遠い国の皇子なんだ。父上に叱られて、こんなに遠いところまで来ちゃつたんだ。」

不自然なしゃべり方で、どこかのなまりがある。

「ふうん。俺も皇子だけど、君みたいに一人で遠くには行けないよ。君つてすごいな。」

二一チエは探り探り話し掛ける。

「そうかな？」

意外そうに言つた後、照れ笑いする。

「でも、実は一人じゃないんだ。今にみんなで迎えにくるんだ。君も危ないから逃げたほうがいいよ。あいつら乱暴なんだ。」

二一チエは一瞬彼が何を言つてゐるのかわからなかつた。

「逃げたほうがいい？そつか！確かに家出した皇子の近くにいたら誘拐犯だと思われちゃうかもな。じゃあ、もつ帰るから。」

黒いフードの少年は突然フードを脱ぎ捨てた。

「僕はジエイル。君は？」

黒いフードの下は黒い肌に赤い入れ墨のような模様が刻まれていた。

「・・・俺は二一チエ。」

あまりの驚きに口が強ばつた。見たことのない肌の色。よく見ると美しさすら覚える赤い模様・・・。

「君に会えてよかつたよ。また会おう。僕の友達になつてよ。」

二一チエがコクリと頷くと、にっこり笑つてまたフードを被つて城下の方へ消えてしまつた。

その晩、夜中とも言つていい時間。二一チエは宮内が騒がしいことに気が付いた。

「王子！お逃げください！」

突然ウイックが部屋に入つてきた。額から血が流れ服にも血がべつとりと付いていた。

「ウイック！どうしたんだ！？血塗れじゃないか！」二一チエがそう言い終わるところで、ウイックは遮つた。

「テラスから行きます。あなたは剣だけ持つてください。」

二一チエは剣だけ渡され、次の瞬間にはウイックに担がれ地面に向かつて落ちていくところだつた。

「わあわわわわわわ？お、落ちるううううー？」あ。ぶつかる。五階からでも死ぬかなあ

「王子、情けないですよ。」

二ーチェは一瞬氣を失っていたが、氣が付くと無事着地し、ウイックに負ぶさっている状態にあった。

「ウイック！ 降ろせ！ 何があつたんだ？ 何で飛び降りたのに無事なんだ？」

ウイックはほほ笑み、ゆっくりと口を開いた。

「今からハーレンが迎えに、来ます。ここで待つていて、ください。質問は、ハーレンが、答えて、くれるで、しょう。」

ウイックの腹部からは血が染みだして、やがて地面上に滴るほどの血液が流れだした。

「ウイック・・・？まさか・・・。」

「あ、なた、は本当に、手のか、かる教え、子でした。でも、あなたは、き、きつ、と、いい、王に・・・。」

呼吸が短い。体温が低い。顔色も非道い。

「も、もしかして、飛び降りたときに傷が開いたのか？」

また、唇の両端を持ち上げ、ほほ笑む。

「あ、なたの所為、では、ないです。私の意、志です。ほら、ハーレンが・・・来る。私とは、さ、さよなら、です。」

確かに蹄の音が聞こえる。城の中から、悲鳴、建物の崩れる音、炎の音、つまり、王国の終わる音が聞こえる。しかし、二ーチェにはどの音も聞こえなかつた。自分の泣き声以外は。

親友が、死んだ。

ハーレンは二ーチェを馬に乗せ口が出るまで百数十キロも休まず馬をとばした。東から太陽が出ると、馬を止め、川辺で休憩した。

「ハーレン、ウイックは死んじやつたのかな？」

半分泣きながら二ーチェはつぶやいた。

「さあな。」

ハーレンは川を見つめながら、他に考えていることがあるような素振りで答えた。

「キートたちは、大丈夫かな？」

二人ともぼんやりと川を見つめている。

「さあな。」

「親父とかあさんは？」

「さあな。」

「俺どうしたらいいんだろう？」

「自分で考える。」

「俺、きっと、いい王に成れるって。ウイックが言つてたんだ。」

「そうか。」

「俺、だから、もう少ししたら、あの国取り返すよ。」

「そうか。」

「ハーレンは手伝ってくれるか？」

「もちろんさ。」

少しの沈黙後。ハーレンは二ーチェが眠つていることに気付いた。頬に涙の跡が付いていた。

「きっと、成れるさ。いい王に。」

リーザー暦2548年。リーザー王国滅亡。国王女王含む15900000人以上が死亡。突然王国を襲つたのは、数百の魔物と呼ばれていた旧時代の化け物達。率いていたのは魔界の第六王子と称する黒い肌を持つ少年だった。なお、リーザー王国王子二ーチェ・ディンバルト、城下警備団団長ハーレン・カスケードの二名は四年間姿を消すことになる。

第2話ラウル出立

『君がこの手紙を読んでいるということは、僕はもう死んでいるんだろう。君は僕の親友であり、最も良き相棒だった、時には喧嘩もしたが、もうそれすらできない。妻ももうじき僕の後を追うだろう。彼女の病気には特効薬も治療法も見つからなかつた。・・・・。最後の頼みがある。唯一信用できる君に。僕の息子を育ててほしい。名前は・・・。』

僕の名前はラウル・ハーゲン。両親が死んでから12年がたつた。リーザー暦2550年1月6日。今日で16才だ。僕を育ててくれた人は・・・。僕は師匠って呼んでるのだけれど・・・。本名はクレイス・マルティネスっていう。

ラウルは朝起きて、いつものように顔を洗い、二人分の朝食を作つた。コンソメスープとサラダと、パンを一切れづつ。パンの焼けるいい匂いにクレイスが目を覚ます。

「おはようございます、師匠。」

いつものことだ、変わりはない。クレイスは長く紅い髪を後ろで縛りながら、

「ああ、おはよう。」

と低い声で言つた。朝食を食べながら唐突にクレイスが言つ。

「そろそろ、お前も一人前だな、家を出る。今日。」

「はあ！？」

ラウルは耳を疑つた。あまりに突然過ぎた。

「今日で16才だろう。もう一人で生きていけ。」

「え、あの・・・。」

ラウルはただただ戸惑う。

「お前を預かつてからずいぶん色々教えてきたな。言葉、遊び、釣

り、剣、言いだせば限りがないか・・・。ラウルはだんだんと理解してきた。

「俺の眼がくもっていなければお前はもうここにじっとしていろべき器ではない。」

ラウルに残された言葉はもう、一つしかなかった。それが涙と共に溢れだした。

「今までありがとうございました・・・。」

ただ、それだけだった。

「いつか旅に出よう。」

そう思い始めたのはいつだつたか。師匠は色々な場所に訪れることが良いことだと常々言つていた。ついにその日が来たのだ。革で造つたバッグに色々な物を詰め込んだ。表に出るとクレイスが厳しい表情で立つていた。

「ラウル、今まで俺がお前を育ててきたのは、一つはお前の父、サミニューに頼まれたからだが、それなりに楽しかった。何でもすぐ覚えたし、剣もサミニューに近づくまでになつた。・・・。お前ならどの王室に仕えさせて恥ずかしく思わん。この山奥から出たお前は見たこともないような世界が広がつている。好きに生きる。」

「はい！行つてまいります。」別れというのに、ドキドキしている。悲しみに未知の世界への好奇心が勝つた。ラウルは笑顔になつて、師に手を振つた。

山を下りると農村が広がつていた。12年間師以外の人を見たことはなかつた。大人は畑を耕し、子供はさらに幼い子供の面倒を見ている。ラウルにとつてすばらしい光景だつた。こんなふうに人と人のふれあいがあつて、それを守るため大人は働いている。ラウルはたまらなくなつて子供達に近づき話し掛けた。

「ここはなんていう村なの？」

子供達はびっくりした様子だつたが、

「セト村。」

とだけ言つてにつこりと笑つた。

「ありがとう。じゃあね。」

喋つた。短かつたが確かに人と会話した。相手は子供だったがにつこりと笑つてくれた。

その日ラウルはうれしくて、いろんな人に話しかけた。大人も子供もいい人ばかりだった。そして夜は宿を借りて眠つた。明日はどうしようか。ここは楽しいけど、もっと遠くまで行ってみたい、と思つた。

早朝、ラウルは遠くから聞こえる馬の蹄の音で目を覚ました。
一匹ではない。

とにかくたくさん馬がこの村に近づいている。

あわててわらのベッドから飛び降りる。

家の主人はまだ気付いていないのか、いびきをかけて眠つている。まだ夜も明けないし、ラウルの耳の良さは半端ではないので気付かないのも仕方ない。

外に出ると音は一層激しくなり大気を震わせた。

（戦争か？）ラウルは身震いした。（もし戦争なら、通りすがりの農村を焼かないはずはないだろう・・・。）急いで主人を起こし事の次第を告げると、主人は真っ青になり、妻と息子を叩き起こし、村中に触れ回つた。ラウルは村人全員が山中に逃げ込んだことを確認した。ちょうど夜が明け切つた頃だった。

東の方から太陽を背にして15・6頭の馬が現れた、乗つてているのはどうやら山賊らしい。

「村に入るな！」

ラウルの大声が響く、が、止まるつもりはないらしい。

「ガキが一匹、邪魔してるぜ？」

「踏み潰しちまおう！ヒヤツハア！」

その内一頭が前に出てきた。

「死んじまえよ！ガキイ！」

ぶつかる瞬間ラウルは宙に舞つた、足刀が山賊の首に寸分の狂いもなく命中した。男は落馬し、泡を吹いて氣を失つた。

「んなつ！？」

山賊たちは馬を止め、ラウルを睨む。

「今こいつ軽く3メートルは跳んだぞ。」

「何だこのガキは！？」

ラウルは口を開いた

「この男のようになりたくなれば退け！」

ドスの効いた声が響く。

「死にたいようだな？ガキ。こつちは10人以上いるんだぜ？」

山賊たちは手に武器を握りラウルを睨んだ。

「仕方ない。僕の忠告が聞けないようですね。」

「ガキが忠告？そんなことより遺言でも考えるんだな！」

一斉に山賊が切りかかる。ラウルは一人目の剣を躲し、顔面にカウンターをいれ、膝で剣を飛ばし見事キヤツチした。切つ先を二人目の眼前に振り下ろし左からの敵を左腕で投げ飛ばしてぶつけた。ほんの2・3分で全員が地面に這いつくばっていた。

20分ほど経つたか、心配した村人達が山を下りると、村の入り口にラウルが立っているのを見つけた。そしてその足元には山賊らしい輩が十数人転がっているのを見て、全てを悟つた。

「ありがとう！旅の人！」

「一人でこんなにたくさん倒したの！？」

「怪我はありませんか！？」

村人達はたくさん歓声をあげ、ラウルに走りよる。ラウルは腰から砕け、倒れた。

「大丈夫ですか！」

ラウルは心配そうな村人たちにポツリと言った。

「怖かつたあ・・・。」

ラウルはクレイス以外と拳も剣も交わしたことはなかつた。誰かを守るために戦つたこともなかつた。今ラウルは初めて一人前になつた。

昏。「じゃあ僕、そろそろ行きます。いろいろありがとうございます。」

した。

ラウルは皮のバッグを持つて、また村の入り口に立つていた。

「いえいえ！もつとお礼をしたかったんですけど・・・。またいつでも立ち寄つてください。」

村人達は皆深々と頭を下げた。最初に喋つた子供が大人をかきわけるようにして前に出てきた。

「兄ちゃん。俺、ジンっていうんだ！また村に寄つてね！俺兄ちゃんみたいに強くなるよ！」

ジンはそう言って握手を求めた。

「ありがとう、またね！」

ジンとラウルは固い握手を交わし、お互にっこりと笑つた。

まだ旅は始まつたばかりだつた。

第3話セイロンとそれとの道

リーザー王国が在った場所から遠く、ある村のはずれの地下室にセイロンという一人の青年が住んでいた。彼は膨大な蔵書とその知識、そして不思議な術を持っていた。人々からは『魔法使い』と呼ばれ、尊敬されていた。

「セイロン様！魔物が村に入ってきた！お助けください！」

地下室へ続く扉を村人が叩く。

「ああ、折角眠れそうだったのに。また結界を張り直さないと。」

「独り言を言いながら、はいはい今出ますよ。と氣の抜ける返事をしてセイロンは表に出た。村人は震えながら魔物が、魔物が、と言うばかりだった。」

「はいはい。もう心配ないですよ。新しく結界を張りましょう。その前に魔物を追い払わなくちゃね。」

セイロンは地面に魔法陣を描くと呪文を唱え始めた。

「火靈カグツチに乞う。聖火を持つて邪惡なるものを祓い給え。呪文を唱える声も氣の抜ける声だ。『次は結界だね。村まで行かなくつちや。案内してもらえます』？」

助けを求めて来た村人にそう尋ねる。

「はあ。」

村人はキヨトンとしている。

「私は方向音痴でね。毎回案内してもらつてるんですよ。」

村人はセイロンを連れて村に帰つていった。

村に着くと何やら騒がしく誰かが喧嘩をしているようだった。

「だから！僕じゃないって言つてるだろつ！僕は剣は使えるけど炎なんか出ないって！」

「じゃあ誰がやつたんだよ！？お前が剣を振つたら炎が出たんじゃないか！なんか仕掛けがあるんだろ！？」

見慣れない一人が喧嘩している。しかも原因は明らかにセイロンの魔法だ。

「あ～。君たち。僕の魔法の所為で喧嘩をせてしまつて」めんないい。

セイロンがペコッと頭を下げ、そつそつと一人はセイロンをジロリと睨んだ。

「魔法？お前がセイロンか？魔界に詳しい？」

茶髪のクルクルの髪の男が言った。後ろ髪が少し焦げている。「ほら、僕じゃなかつた。僕は炎なんか出せないんだから。」

ややあつて緑髪の男が茶髪に言つ。茶髪はすでにセイロンの胸ぐらを引っ張つている。

「てめえ、この野郎！俺が何日待つたと思つてんだよ！手紙届いただろうが！しかも俺の髪チリチリにしやがつて！」

セイロンはガクガクと前後に揺られながら手紙について考えた。

「はて・・・・。手紙・・・・。ああ～。たしか・・・・・。どうひら様？」

「二ーチエだよ！二ーチエ・ディンバルト！」

二ーチエは顔を真つ赤にしながらセイロンを振り動かした。

その時、後ろから金髪の背の高い男が、木剣で二ーチエの頭を殴つた。

「二ーチエ。何してんだよ！セイロン探しに行ぐぞ、今日こそこそ村にくるはずだ！な！・・・・どうもすみませんねえ。腕白で。」

二ーチエは泡を吹いている。もつ緑髪の男の姿は無かつた。

「あ～。私に何か用ですか？」セイロンは金髪の男に尋ねた。

「てめえがセイロンかこの野郎！約束の日付けからもう一週間経つだろうが！」

「いや～すいませんねえ。忘れっぽくて。二ーチエさん、ハーレン

さん。何の御用でしよう~?」

地下室に案内され、話を聞くチャンスなのだが、セイロンの脱力するような声はなんとも言えず調子が狂わされる。

「あ、いや。先程は取り乱してすいませんでした。早速ですが、セイロン殿は魔界についてどの程度~」存じでしようか?」

ハーレンは礼儀正しく聞いた。

「そうですねえ・・・。魔界つていうのは簡単には行けませんから、書物によると、ですが。まず魔界つて言いましても、ちゃんと人間がいるんですね。それを魔族と言つんですが、肌は漆黒で、言語は違いますがこちらの言葉も喋れます。魔族の言語は難しいので基本的に脳は発達してますねえ。それに魔族は魔法を使います。魔法についてはまた後程。う~ん。あとそれから魔物といつのは魔族のペットと思つてください。」質問は?」

ハーレンとニーチェはスースーと寝息をたてている。良く見ると体は傷だらけで、さつきの戦闘で付いた傷では無い傷も開いているようだった。

「うああはあ。よく寝たあふ。」

ニーチェが目を覚ますとハーレンと誰かが話をしているのが聞こえた。

「おや、ニーチェ君が目を覚ましたよ~。どうです?気分は?」
見たことの無い中国人みたいな服の男はニヤニヤとへりへりの間の顔でニーチェを覗き込んだ。

「あなたは・・・。誰?」

「おやおや、記憶がtronでますねえ~。私は。セイロンです~。」

ハーレンが口を挟む

「傷、うまく治つたな。ニーチェにきてくれ。」

ハーレンに呼ばれ狭いテーブルを三人で囲む。

「ゴホッ。じやあ話をはじめよ~。セイロン殿。ニーチェ。」

「セイロンでいいですよ~。照れるなあ。」ニーチェは最近の傷が

すっかり治つているのに素直に驚いている。

「じ、じゃあセイロン。俺たちと一緒に・・・。」

「お断わりします。」

二一チエが我に返る。

「おいおい。ハーレン話を最初から頼むよ。」

ハーレンは二一チエに向き直り言ひ。

「いいか、セイロンには魔界について聞きにここへ来ただろ？だが実はセイロンは高度な魔術をなんなく使いこなす魔法使いだ。」

「いやー。初歩ですよ。」セイロンがまた照れる。

「俺たちにとつてはすぐえの！それで、セイロンがいれば旅も楽になるだろ？」

大体は呑み込めた。至極もつともな意見だ。

「でも、断られたわけだ。」

二一チエが推測できる限りのことを口にするとハーレンには補う言葉はもう無かつたみたいだ。

「そういうことだな。」

ふうと溜息を吐く。

「なんで？」

突然二一チエはセイロンに問う。

「なんでか・・・？ そうですねえ。少し昔の話をしましょ。」

セイロンの眼に悲しみのようなものが一瞬顔を出した。

「私はこう見えても8年前世界を救つたことがあるんです。公には伝わらないですが、魔界での話ですから仕方ありませんよねえ。」いきなりの伝説じみた話を聞かされ声も出ない二人。セイロンは勝手に話を進める。

「魔界に住むある魔族と戦いました。もちろん仲間もいましたよ。リーダーのカーム、剣の達人クレイスとサミニーゴ、魔界人ミスティン、そして私。」

私はミスティンに、そのー。惚れてたんです。でも、彼女は死んでしまいました。魔族を裏切り、人間に味方し、さらに、私達はあるの、

愛し合つてましたから～。そしてここは私達一人が短い間でも住んでいた場所なんです。ここは彼女の墓なんです。だから私はここを離れないと決めたんです。解つていただけましたか～？」

4・5秒部屋に沈黙が訪れる。

「そうか。無理は言わないよ。」

先に口を開いたのは二一チエだつた。ハーレンも目を閉じ溜息をつく。『仕方ない。』のジエスチャーだろ？。

「じゃあ魔界の事は大体聞けたし、いこうか二一チエ。」

ハーレンが出発を促す。

「ああ。色々ありがとうセイロン。また寄るよ。」

席を立つ一人をみて、にっこり笑つた

「また、逢いましょう。お気を付けて。」

「はあ・・・。上手くはいかないもんだな。」

ハーレンが呟く。二一チエは下を向きながら

「ああ。」

とだけ呟つ。そこに前日（ハーレンと二一チエは16時間以上眠つていた。）二一チエと喧嘩していた緑髪の少年が歩いてきた。

「あつ！昨日の・・・？ん？傷がない・・・？」

緑髪の少年が不思議そうに二一チエを見つめる。

「この先の家のセイロンつていうヤツが治してくれたんだ。・・・

昨日は悪かつたな。」

人間切ない話を聞くと少しあさしくなるようだ。

「いや、いいよ。こちらこそ見苦しい様を見せた、「傷だらけだな。君も傷を癒してもらいにいけば？セイロンに。」

「ああ、そうするよ。ありがとう二一チエ君？僕はラウルつていうんだ、君とはまた逢いそうな気がするよ。またね。」

不思議な言葉を残して、ラウルという名の少年は去つた。二一チエとハーレンの一人旅は今しばらく続くようだ。

第4話)ティアナ・リリカとセイロン・ラウルの過去と動向と(前)(前書き)

永らくお休みしていた執筆活動再開です。どうぞよろしく。

第4話「ティアナ・リリカとセイロン・ラウルの過去と動向と（前）

「元リーザー王国跡地。そこは4年前の魔族の襲来以来魔族と魔物の住む地になっていた……。

「ジエイル様。魔界から使者が来ております。」

薄暗い部屋にその声が響くと、かつてリーザー王国国王が座つていた玉座（ついぶん形は変わつているが）に座つていた男が返事をする。

「……通してくれ。」

使用人か部下と思われる男が

「はっ」

と切れの良い声が聞こえてしばらく、初老の魔族の男が入つてくる。

「ジエイル様。お久しううございます。グルンでござります。」

「グルン、久しづりだな。4年振りか。お前が使者ということは相当重要なことだろう?」

「はっ。恐れながら凶報でござります。例の魔女が脱獄しました。おそらく新術を使つたのでしきう。あの魔女にとつては獄中で術を開発ことすら可能だつたようです。」

「そつか……まあいい。ただし、次見つけたら確實に殺せ。」

「はっ。承知しました。」

一連の会話を終えるとグルンは一つ咳払いをして言った。

「私はしばらくこちらに居りますので、なにかあればなんなりとご命令を。」

そういうつて部屋を後にした。

「くあーーー」つちは暑いわねえ。ま、牢獄よりましね。ねえ?リリカ!」

ひどく暑い日、大きな街道に突然一人の人間が現れた。

「ほんと…暑いですね。でもあたしは牢獄には入れられてないです
から…。ディアナさんは何年ぶりのシャバなんですか？」
ブロンズの女の子と銀髪の女性は、周囲の田も気にせず話をしている。

「なんだ…？今突然…。」

「あの人見て！肌真っ黒。」

「あの子カワイイ～！」

周りの人々が注目の視線を浴びせ、さらにはヒソヒソと声をたてる。
が、まだ一人はマイペースに話を続ける。

「え～と、7、8年ぐらい？ていうかシャバつて…。あんた幾
つ？」

いつのまにか人が集まつていて、ポカんとした顔で見ている。

「そろそろ行きましょ～。ディアナさん立つんだから。とりあえず
あたしんちに。」

二人は近くのリリカの家を目指して歩き始めた。

「リリカって一人暮らしなの？」

普通の家より幾分大きな家を前にして、ディアナが訊ねる。

「ええ。部屋余つてますから、一部屋あげます。魔界の話してくれ
さいね？」

リリカはドアの鍵を開け、ディアナを導いた。

「いいよ？私の知つてること、色々話してあげる。」

二人は食卓のテーブルで話をはじめた。

「そうねえ。私が捕まつてる間のことは何にも言えないんだけど、
言葉を遮りリリカが聞く。

「そもそも何で捕まつてたんですか？」

「う～ん。じゃあそこから話そつか。魔界には人間を極端に嫌う魔
族とわりかし友好的な魔族がいるのね。私も後者なんだけど、ちょ
い昔、ヴィーノっていう魔族の男が居てね。そいつが人間界の侵略

を企ててたわけ。」

「今の第6皇子みたいにですか？」

「今はどうか知らないけど、それまでの魔界の王は人間との関わりはタブーとしてきたの。さつき言った二者が争わないようにな。それで、魔界の王は魔族間の争いを避けるため、数人の人間を魔界に召喚して、ヴィーノを止めようとした。苦肉の策ね。」

「なるほど、人間に解決させることにしたんだ！」

「私の親友は特別にその一行の案内役をしててね。それでヴィーノ一族は滅ぼされてめでたしめでたし。のはずだつたんだけど、ヴィーノは死ぬ寸前私の親友に呪いをかけたの。私はそれを解くために禁術に手を出したの。呪いつていうのはかけた相手が死ぬと解けなくなるから、一旦その魂を呼び出して強制的に呪いを解かせるものなの。でもそれもタブー。そもそも呪い自体禁術なんだから。」

「それで親友さんは助かっただんですか？」

ディアナは悲しそうに首を振る。

「あたしにはできなかつた。その前に見つかっちゃつて捕まつたからね。でも、その時には親友は人間界で最高の頭脳をもつ男と結婚してたから、呪いは解いてもらつたかもね。」

「でも、非道いです。たつたそれだけで8年以上も牢獄なんて。」

ディアナはうつむきながら言つた。

「私が捕まつていた理由は他にもあつてね。私は魔界でも最高クラスの魔女なんだ。」「？それが何か？」

リリカはいまいち理解できない。

「私の魔力は魔族の王にだつて通用するのよ。そんなあたしが禁術を使つたなんていい口実。生きては出られないと思ったわ。」

リリカはじつとディアナを見つめていた。

「リリカはどうして私を助けてくれたの？」

リリカはにっこり笑つて答える。

「あなたが必要だからです。・・・あたしの家は昔から占いを糧に生きてきたんです。独自の魔法も伝わっていまして。」

「ふーん。それで？」「だから、今世界は第6皇子に脅かされてしまう！この世界を救える人を探していく、一番最初にあなたの名が挙がったんです。今、二人目も占つてみます。」

リリカは紙と筆を取り出し、目を閉じる。手が高速で動きだし絵が描かれる。

「高速自動書記か・・・。」

ディアナの感心と疑心が驚愕に変わる。

「終わりました！え」と？名前は？。セイロンさん。こんな感じでディアナさんも見つけたんです！信じてもらいました？」

ディアナの表情は驚きの表情から変わる事無く呟いた

「全面的に信じるよ・・・。確かに世界を救うにふさわしい最高の頭脳の持ち主だ。」

リリカもそれを聞いてその意味を悟った。二人はすぐにセイロンを訪ねることにした。

「ジェイル様・・・。ただ今頼まれていた物が届きました。」

ジェイルは無言で頷きそれを手にする。

「ニーチェ・ディンバルト。ハーレン・カスケード。リリカ・フィナード。か・・・。この3人が余に危機をもたらすと・・・？ふつ・・・。まあ片手間に捜索しろ。あと、魔女ディアナにも気を付けておけ。まあ、4人程度に余が追い詰められることはないだろうがな・・・。引き続き余の驚異になる者を探してくれ。以上だ、退け。」

薄暗い地下室に驚きの声が響く。

「君がラウルくん・・・？サミーゴさんの息子！？」

ラウルはあまりの大声に身を仰け反った。

「はい・・・。ラウル・ハーゲンです。けど・・・？」

「そうかあ。今いくつだつけ？18？19？」

「今18です。僕の父さん知ってるんですか？」

セイロンは小さくはあ？と言つた。

「僕のこと、聞いてないの？クレイスさん……。」「いえ……全然。」

セイロンは大きく溜息を吐いた。

「そう……。クレイスさんそういう事言わないしね。」

セイロンは俯き、また溜息を吐いた。

「あの～父さんの事教えてもらえますか？僕は何も知らないんです。」

「暗そうな顔をしてラウルも俯いた。

「いいよ～。代わりに話そう。私が生まれた村はね。セト村っていうんだ。」「え！？それっ……。」

「まあ最後まで聞きなよ～。そこは、別名魔界の入り口っていうね～。だけど今はクレイスさんが守番してるから。向こうからはこちらに来れない。」

いつのまにか声が真剣になつていて、少し話が途切れた。

「話がいきなり逸れたね。そこで僕は育つたんだ。12才迄ね。そして、魔族がセト村を支配しようとしたのもその年だつた。私はその時サミーゴさんとクレイスさんに命を救つてもらつてね、そこで魔力が目醒めてサミーゴさんたちについていく事を決めたんだ。」「えっと……。僕はその頃は……？」

「たしか、奥さんと暮らしてたはずだよ。奥さんはすでに病氣だつたから、魔界の薬ならと思つてサミーゴさんはずつと探してた。でも、見つからず魔族の男に殺されてしまつたんだ。私は最後まで恩を返すことができなかつたよ。だからその代わりに、と言つてはなんだけどサミーゴさんの遺書を魔界の入り口で守番していたクレイスさんに渡しに行つた。その四年後、やつとの思いで仇を取つたんだ。まあ、細かいことは追々語る。今日はこの出会いに乾杯だよ。」

「ラウルはあまりに大量な情報に戸惑いながらもセイロンと杯を交わした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4403a/>

ROUGH-HEWN TRAVELERS

2010年10月17日04時04分発行